

研究情報

多産系母豚（Topigs20）を活用した肉豚の生産

近年、多産系母豚に対する関心が高まり、県内の養豚農家においても導入が進んでいます。一方、多産系母豚を用いて生産される肉豚の情報は少ないため、導入を迷っている農場も少なくありません。そこで、Topigs20に3系統の種雄豚を交配し、生産された肉豚の産肉性や肉質に加えて、近年注目を集めている筋肉内脂肪含量（サシ）について調査しました。

多産系母豚Topigs20に、ローズ芯筋肉内脂肪含量を改良目標にした家畜改良センターのデュロック種系統豚ユメサクラエース、民間種豚場のA社およびB社の厚脂タイプデュロックの3系統を交配して肉豚（WLD）を生産しました。

ユメサクラエース



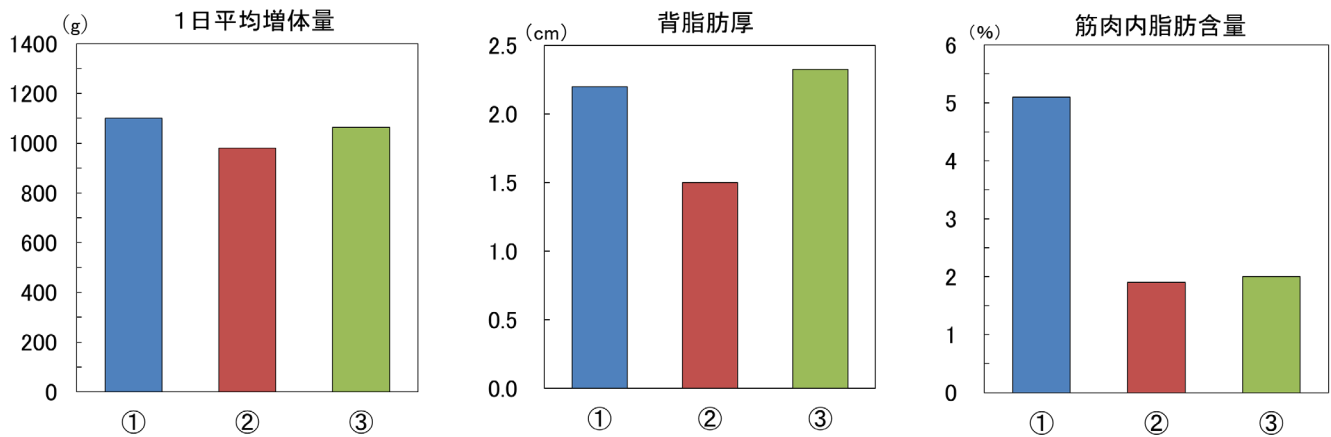
A社



B社



Topigs20から生産された肉豚（出荷時）



種雄豚ごとの肉豚の特徴

■①:ユメサクラエース ■②:A社 ■③:B社

肥育期間の1日平均増体量（60kg～出荷）は、種雄豚の系統に関わらず国内の平均値（約950g）を超えており、ユメサクラエースおよびB社はA社と比べて発育が優れていました。背脂肪厚は、ユメサクラエースおよびB社が厚く、目標値（2.0cm）を超えていました。ローズ芯の筋肉内脂肪含量は、ユメサクラエースが多く、国内平均値（約2.3%）の2倍程度あり、ローズ芯ではP.M.S.No[※]4程度の脂肪交雑（サシ）となりました。



ユメサクラエースの
精肉（ローズ）

今回の試験では、多産系母豚のTopigs20を利用した肉豚は、十分な発育を示し、掛け合わせる種雄豚の系統により背脂肪厚および筋肉内脂肪交雑の改良ができたことから、種雄豚の系統ごとの特徴を活かして、生産者が希望する特徴をもつ肉豚生産ができる可能性が示されました。

畜産技術センターでは、母豚の飼養管理方法とあわせて生産者に情報提供してまいります。

※P.M.S.No：豚肉の脂肪交雑基準。1～6の6段階で数字が大きいくほど脂肪交雑が多い

12月16日、川崎市立幸町小学校で「わくわくモーモースクール」（主催：神奈川県酪農教育ファーム推進委員会）が開催されました。このイベントは、小学生に乳牛とのふれあい体験を通じて、動物への関心を高め命の尊さを伝えると共に、酪農に対する理解を深めることを目的として毎年1回開催されています。普及指導課職員は、酪農家、乳業メーカー、関係機関と一緒に委員会メンバーの一員として参加しました。

当日は、搾乳体験、子牛とのふれあい体験、バター作り体験、牧場の仕事や牛の体の秘密などの授業を行いました。搾乳体験や子牛とのふれあい体験では、生徒たちは牛に触れて生きた牛の温かさを実感していました。バター作り体験は、新型コロナウイルス感染症対策のため、VTRを見ながら各教室で行いました。

酪農家が担当した「牧場の仕事について」では、農場で使用している道具等を紹介しながら授業を行ったところ、多くの児童が道具を手にとって熱心に観察していました。当所職員が担当した「牛の体の秘密について」では、牛の一生や牛乳が生産されるまでの様子などについて学習しました。

参加した酪農家や関係者には、児童と同じ牛乳を使ったメニューの給食が提供されました。昨今の厳しい情勢のなかですが、児童たちの牛や酪農への関心の高さや反応を見て、酪農家にとっても励みになるイベントとなったものと思われまます。畜産技術センターでは、今後も牛に関する知識や酪農への理解を深める活動の支援を続けて行きます。



子牛とのふれあい体験の様子



牧場の仕事の授業風景



牛の体の秘密の授業風景

イベント情報

海老名中学校の職業講話授業に参加しました

令和5年2月1日に海老名市立海老名中学校で1年生を対象として開催された、「職業講話」授業に講師として参加しました。「職業講話」とは、生徒たちが「働く」ことの意義や目的について、しっかり学び、考えるための機会として、「実際に現場で働く人」を講師として招き、仕事内容について話を聞く場のことです。今回は、企画研究課の折原専門研究員が畜産技術センターの研究員の仕事について紹介しました。

当日は、当所の他に、消防士、警察官、保育士、助産師、焼き鳥店、アスリートなど様々な職業の人が自身の仕事内容の話をしました。

授業では、20名程度のグループに対し、30分間程度で仕事内容を伝えます。今回は、スライドを使いながら自身が担当した研究内容や作業について話をしました。

生徒からは、「仕事で大変なところ」、「なぜその仕事に就いたか」、「いつその仕事に就くことを考えたか」などの質問がありましたが、中には「と畜時の苦痛を緩和する研究はしているのか」などの質問もあり印象的でした。

職業講話は、新型コロナウイルス感染症が拡大し、いままで実施していた職業体験が実施できないため、生徒たちが業界の生の声を聞く貴重な機会となっているようです。今回参加者の中から、畜産研究について興味をもつ生徒が現れてくれると嬉しいです。



授業風景

